

金子光晴と賢治

宮澤 健太郎

はじめに

賢治評価の初めは、左派たとえば草野心平、辻潤だとか佐藤惣之助などであったが、今の時代には多くの人々の頭上に燦然と輝いている。一方で賢治とほとんど同時代に生きたニヒリズム詩人といわれる金子光晴は賢治をどう評価していたのか、していなかったのか、について論じてみたい。

金子光晴とは

一八九五年（明治28）12/25、愛知県海東郡越治村大字下切で生まれた。本名安和、父、大鹿和吉、母りやう。父の家業は酒商、後に名古屋に出て、興業、鋳山関係の仕事をしていた。その関係で、六歳時に、清水組名古屋出張所主任、金子莊太郎・須美の養子となり京都から東京へと転居。そこで、小林清親に日本画を習ったという。銀座竹川町のキリスト教会にも連れられて行ったという。一二歳の時（明治40）、暁星中学に入学。二年後に落第。大正2

年4月(一八歳) 早大英文科予科に入学。そこでワイルド『ドリアン・グレイの肖像』、アルツイバーシエフ『サーニン』に心酔して、流行していた自然主義に反発、ナイヒリズムに踏み込んだと言われる。その後東京美術学校日本画科や慶応大予科に籍を置くが次次中退した。二〇歳(大4)ごろ肺炎カタルで病臥のおり、保泉良輔・良親(全集では良丞、日本近代文学大事典では良弼)兄弟のすすめで詩作を始めたという。詩『反対』で「僕は信じる。反対こそ、人生で唯一つ立派なことだと。／反対こそ、生きてることだ。／反対こそ、じぶんをつかむことだ。」と書き、これこそ光晴の思想を余すところなく示している。この直後に光晴は外国に出る。ベルギーなど西欧文化に触れて、高踏派のベルファール、さらにはボードレー、レニエ、ルコント・ド・リールの詩法、パルナシアン(高踏派)にまで詩の道を学ぶ。このとき書き付けたノートから生まれたのが「こがね蟲」(大12)そして「大腐爛頌」であった。帰国後は「日本詩人」「楽園」などの編集などしていたが、関東大震災のため、関西に流浪し、大正13年7月には、森三千代と結婚した。長男乾の誕生(大14)のあと、あまりに困窮した為に森の実家、長崎に行き、その後、森ともども上海に流浪する。さらにヨーロッパへも流浪する。そのあたりで書かれたのが「鱈沈む」(昭和2/5)である。この詩集では流浪の成果なのか、異邦人の眼を獲得したと言われる。昭和10年の「鮫」が光晴詩の到達点とも言われている。第二次世界大戦中は戦争には全く背を向け、山中湖に疎開していた。戦後はランボーやボードレー、アラゴンの訳詩や、詩集「落下傘」(昭23)、「蛾」(同)などを出版。40年代には『風流戸解記』(昭46/9)といったおどろおどろしくも妖しい小説も書き、一九七五年(昭和50、6/30)に死去。

賢治が生まれたのは、光晴が生まれた次の年であった。詩人であり、童話作家であった賢治、一方光晴も詩人であ

り童話も書いた。労農党を支持した賢治に反軍思想を貫いた光晴。ところが賢治は三七歳で亡くなり、光晴は八〇歳まで生きた。この二人は最初の三七年間は同時代的な体験はほとんど同じであったろう。しかし個人的な部分の食い違いが二人の個性をますます際立たせていったのだ。詩人としては光晴に十年の利があったが、童話では全く賢治におくれをとったことも確かである。

光晴流観点からの詩人賢治

賢治の詩集「春と修羅」は大正13年4月に刊行されたが、光晴は「こがね蟲」(大正12年7月)で既に詩人と認められた詩人なのであった。光晴には、それ以前の大正8年1月に処女詩集「赤土の家」もあった。それは賢治より五年も早い出発である。そのころ、すでに朔太郎(大6「月に吠える」)はもとより光太郎(大3「道程」)や白秋(明42「思ひ出」)などの大御所たちがそれぞれ詩集を出し、確固たる地位を築いていた。その「こがね蟲」の自序に光晴は「余が生命をもて賭した贅沢な遊戯である。」と書き出し、白秋の「邪宗門」がそうであったように文体は象徴詩的な趣きも強く、漢語も多用される絢爛たる作物であった。その最初の詩『雲』はつぎのようである。

雲よ。

栄光ある蒼空の騎乗よ。

渺か、青銅の森の彼方を撼動し、

意、王侯の如く倨傲り、

国境と、白金の嶺を渉る者よ。

お前の心情に榮えてゐる閱歴を語れ。

放縦な胸の憂苦を語れ。

とあり、その自然への語りかけにおいては賢治と大きな隔たりはなかった筈である。しかしその向う所は自ずと異なっていた。光晴のそれは周辺事実、社会へ対峙する詩的マクロ空間、賢治のは宇宙にひらく内的ミクロコスモス。その開きはしだいに大きくなるが、第二次大戦という修羅場を経験していない分だけ、賢治はすこし得をしたようにみえる。

光晴の言動

賢治に関しての光晴の言及の最初は、賢治の死去四年後の昭和11年11月、書評「草野心平詩集『母岩』雑話」であり、そこでは「宮沢賢治などという男」と軽くあつかわれている。

草野君の詩のおしつけがましきは、ためらう一線を越える時のこわごわな感と、その反動的な強引からきている。だから案外彼の甘えには裏があつて、友人関係以外に、他人を認めることもしているし、そもそも、本格

的な探究心などという季節外れなものにすぎない。彼は自分の熱量をよく知っていて、その熱量にあざむかれる顔ができる男なのだ。

そういう草野が、宮沢賢治などという男をみとめる気持ならば、満更わからなくもないと思う。草野君の詩を批評するつもりではなかったが、そして、また、批評にもなにもなつてはしない断片語を一二書きつけたにすぎないのだが、こんな片語を五十も百も書きつけたいほど彼に就いて云いたい事が多い。彼は、チャンピオンになるかもしれない。それだけのいろく々な条件を具えていると思うが、彼が多くのおえらい詩人方と同様に、一つの宇宙観のまわりをどうくめぐりして恐悦至極になってしまつては困ると思う。例えば萩原朔太郎が、塩だしをした、間ぬけな抒情詩を御符のようにかつぎまわつてるような。

(中央公論社全集 15巻、486p 以下同 傍点論者)

そもそもここでは賢治を評価した草野の懐の深さを評価するが、賢治に対しては全くの否定ないし無視、とうけとつてもいいだろう。昭和29年「現代詩鑑賞」(河出新書)へ大正末期の諸傾向でもそれは殆どかわらない。

それにも拘らず彼(佐藤惣之助!論者注)は、この頃の詩人のなかで、異才であり、驚異であったのだ。それは彼が、外国のかりものでない、この国の自然のなかからむやみにかりあつめて、厩大な材料の貯蔵をもつていたからだ。どんな用途になつてゆくか知らないが、その貯蔵は人をおどかすに足りたし、この貯蔵の情熱は、あいてをたじろがせた。だが、極言すれば、惣之助の詩は、まだ詩にいたりつかない、詩の材料だったということ

ができる。後藤大治にしても、中西悟堂にしても、宮沢賢治にしても、当時惣之助の風をのぞみ、その影響で詩を書きはじめた連中には、多少ともみな、その傾向がある。そして、多作家である。上述のような詩人たちが、それ以前の詩人達とはっきり区別することができる点は、彼らが本質に於て楽天的であり、太陽派であるということである。そして、そのことは、デモクラシーの楽天精神と呼応して、当時の時代思想になったのである。

(同全集10巻、145p)

このようにすべての大正デモクラシーの新詩人達が佐藤惣之助の影響下にあつたような詩観もある意味で大変興味深い。それは草野や辻潤、佐藤惣之助といった社会派詩人の動きが当時強い一派をなし、それゆえ賢治の作品もその一派の一部としてのみ理解されていたという事実が如実にそれをしめしていよう。

昭和26年、光晴の「近代詩入門講座Ⅰ」(新興出版)の中へ大正詩史で光晴は、大正詩人達について彼らは「安養浄土思想」をもっていた、ともいう。

大正の詩を支配していた神は、万有神であつた。この慈悲ぶかい神は、死人の骨にまで安らかな所を与えてくれる。神々は、各自の秘蔵の酒を所蔵していた。詩人は、その酒を御馳走になりにくればよかつた。ペシミズムも柔和で、どこか、育ちのよいことをおもわせた。万有神は、無神論者もつ唯一の宗教であつた。この時代のニヒリストは、妥協の余地が多くあつた。そして、そのインテリたちはカトリシズムにもなれば、仏陀の人格を

崇拜することもできた。それが万有神論者の寛大さであった。人間は、神の寵児であった。大正時代のデモクラシー思想には、そういう安養浄土の思想とえらぶところのないものがあつた。高村光太郎にも、千家元麿にも、佐藤惣之助にもそれはあつた。僕自身の「こがね蟲」も、おなじ万有神の讃歌であつた。宮沢賢治とか、草野心平とかいう後代に活躍している詩人も、正統にそれをひきついでいる。たゞそれがやゝ、観念的なものから脱化しかかっているにすぎない。その無邪気さで、彼らは、ヒューマニズムをうたい、自然をうたい、機械をうたい、科学文明をうたい、ソシアリズムまで唄にしている。

(全集 15巻、55p)

ここに光晴が理解した安養浄土思想は賢治の場合そう見えた面も確かにあつた。しかしそれは賢治のすべてではなく、光晴は賢治の本体論的な一面を見損なっていたからに他ならない。

昭和44年の「文学的断層」へ詩人についての放談では光晴は拓治や賢治の作品は「素材をころがしている草稿」とまで言い切っている。

「青猫」は、「月に吠える」からもうひとつ世界が広がって特異なファンタジーの世界にわけ入ることになります。「夢にみる空家の庭の秘密」というのがありますが、あれは、整理しながら病的でゆううつな一つの世界をこつとりとつくりあげています。前代に比をみないでしょう。拓次とか宮沢賢治とかの場合はそれほど構成的ではない。素材をころがしている草稿といった感じがするのです。西洋の古典的な詩の考え方からすると、ああいうものは試作にすぎません。

(全集 13巻、44p)

光晴が賢治作品をもって草稿と見た目は確かに正しい。賢治においてはじつに草稿の一つ一つが定稿だったから、その草稿の部分つまり下書き、がおおきな意味をもっているはずだ。草稿の総体が賢治作品と言い換えてもいいくらいなのだから。現実にはものを多面的に把握しようという賢治の策略でもあったはずだ。

同じ44年の書評「草野心平『わが青春の記』について」では、賢治が光晴に便りを出していることが書かれている。

宮沢賢治はどういうつもりか、僕に、なんだかお経を書いてやると言ってきたことがあったが、遂に果たさず死んだ。みんなにもくれたのかどうかわからないが、一面識の僕にそんなものをくれる了見がわからなかった。その宮沢のこともよくわかった。高村光太郎も、萩原朔太郎も一、二面識がある位で、よく知らないが、この本でよくその風貌がつかめる。

(全集 13巻、306p)

この件については昭和38年4月の「現代詩手帖」で光晴は〈へ生きることと詩〉という長谷川龍生との対談でも次のように言っている。

長谷川 宮沢賢治はいかがでしたか。

金子 全然。本はもらったけど読まなかった。あるとき、彼がお経をかいてくれるといってきたんですが、ぼくはお経には興味がないから、「いらねえ」といって断った(笑い)。

長谷川 宮沢賢治はびっくりしたでしょうね(笑い)。

金子 あの人も生きているうちに、もつとチヤホヤしてやればよかった。死んでからじゃしょうがねえなあ。死んでからは抹殺されたほうがいいくらいですよ。

本（多分「春と修羅」）も手紙も送られたが、チラッと眼を通して読まなかった、ともみえる。

草野をとおして光晴は賢治を紹介していたことはまず間違いないだろうし、賢治も草野を通して光晴を意識しはじめたことが推測される。

「新雑事秘辛」（昭46/6、涛書房）の光晴のへ詩と詩人についてでは、はっきりと光晴は賢治の詩が好きでない、といっている、その理由も書いている。

けどね、本来の詩てのは、もつとピンと張りきったものでね、ぐずぐず反対をいう人もいようが、一応美しいものでなくちゃならない。そういう意味でね、スマートなものだけがいつも脳のヒダにのこりつく。あの当時の第一線の詩人は、日夏耿之介にしても拓次みたいなのに、うす汚くはないですよ。そしてもう一つはね、拓次の場合、宮沢賢治なんかちよつとちがうかもしれないけど、ああいう人達の中にはね、ああいう芸術の中に、何といひかな、まあ朔太郎の「青猫」ってものは「月に吠える」の感傷から、ファンタジックであるが、一つ一つの世界が広がって、「夢にみる空家の庭の秘密」「恐ろしく憂鬱なる」などがリアルな別の世界を作りあげている。そういうすつきりしたもの（美の世界）がちがっている。大手とか宮沢とかの作品を僕は、好きでないせいでもあるう。周円しないということかもしれない。その点、朔太郎以来、詩の草稿ばかりよまされて僕はうんざりしてい

る。

(全集 6巻、241 p)

八〇

ここに光晴の認める世界が一種のファンタジックな世界であることがしめされる。特徴のあるスマートさと清潔感のある美にそったもの、という意識である。あるいは「宮沢賢治なんかちよつとちがうかもしれないけど」というところに賢治の詩が拓次とちがって、薄きたなさのない透明な何かを持っているかもしれないという一種の仮想を宿したのかもしれない。

昭和48年4月の「天邪鬼」(大和書房)では、文学者の二面性についての記者との興味深い問答がある。

——金子さんの詩は強烈なりアリズムですね。美意識を一方にかかえながら、いつも女のケツをまくっているような大胆さ、むしろ美意識を逆手に取っているという風な。他に詩の世界の人で、性に対して異常な執着を燃やした人はおられますか。

金子 萩原朔太郎なんかそうじゃないですか。高村さん、三好達治は正常ですね。

——宮沢賢治なんかどうですか。あの人は生涯、童貞でいながら、教師をしていて、教室に北斎などの春画を置いていたという話を、この間、ある雑誌で読んだんです。ちよつと妙なんです。

金子 山村暮鳥なんかもそうですね。そういうものと、反するものが葛藤している状態が、一生、別の生活をしているんです。

(全集 12巻、388 p)

昭和40年以降の宮沢賢治ブームのなかで光晴の賢治への視点も多少深くなって来たことが読み取れる。しかし、光晴の視野ではあくまでも賢治は地平線の彼方の存在であり、賢治にとってもこの下半身的怪物は賢治の潔癖性から相いれることが不可能な存在であったようにおもわれる。それゆえにこそ賢治が光晴にお経を書いてやろう、といった意味がそこによみとれるのだ。

童話を書く光晴

賢治が大正10年ごろから童話を書き出したことはよく知られている。それは明らかに、中央文壇での童話童謡運動や三重吉の「赤い鳥」の敷衍の影響だが、光晴も童話を書いていた。賢治に遅れることおよそ五年。では光晴の童話とは一体どういう意味があったのだろうか。そこには詩の世界で展開される反逆、反軍、エログロ、アナキーの要素は一切ない。強いて言えば良い子の為の童話が多い。時期的には大正14年から昭和16年までにかけて、「少女倶楽部」、「少年倶楽部」、「婦人子供報知」、「上毛新聞」、「国民新聞」、「女学文芸」、「婦人倶楽部」、「新女」などのメディアで発表された七六篇の作品を数えることができる。うち「マライの健ちゃん」(昭18・12、中村書店)のみが刊行されている。時期的にはこの期に出された児童本としては、光晴が詩で叫んでいた反軍内容と相克しそうであるが、あるいはそうでないかもしれない。そのあたりのことは「百合合児童文化16」の『白秋と光晴』にて詳述するのでは非参照頂きたい。具体的作品を掲載された媒体ごとに羅列してみよう。

「少女倶楽部」……大正13／6『蝸牛』、／7『蘭の花』、大正14／5『テニスのボール』、／9『母校』、大正15／2『嵐の夜』、昭和2／6『青葉の笛』、昭和3／2『あゝ祖国』、／5『燕のおみやげ』、／10『オスタンの暁』、／

11 『黄菊姫、白菊姫』、昭和4/11 『オランダの母』、昭和6/1 『愛の旗じるし』、/2 『リユクサンブル公園の少女』、/7 『笑ひナンネット』、/8 『ミチイの動物園』、昭和7/9 『白いお皿』、/12 『母をたずねて』、昭和8/1 『五つの花物語』、/12 『花づくり』、昭和9/1 『大砲の献金』、昭和10/8 『セシル姫』、昭和11/11 『エチオピアの黒鷲』、昭和12/1 『無言の勇者』、/7 『蘭の花』、/10 『黙りん坊』、昭和13/2 『モンマルトルの愛国少女』、/4 『妹よ、いずこ』、/6 『俺は日本人だ!』、昭和14/1 『鳩』、/2 『裏街の薔薇』、『山の子守唄』、/3 『ガルバルディと母』、『ニオノの姫』、『花は散らず』、/4 『ぶだう物語』、/5 『うつくしい余興』、『金貨』、/10 『母は強し』、/12 『空はうるはし』、昭和15/3 『風車小屋の天女』、昭和16/2 『デイヘムの甲冑』、/3 『乙女よ雄雄しくあれ』、昭和18/12 『マライの健ちゃん』

「少年倶楽部」……大正14/1 『凧』、/2 『故郷の友へ』、/5 『ノートルダムの曲芸師』、/8 『愛の勇将』、大正15/3 『母校』、/11 『嘆きの槍』、昭和2/9 『アッチラの馬』、/10 『燕王軍をかへす』、/11 『霧』、昭和3/2 『正義は勝つ』、/10 『黒い下士官』、/12 『名剣旭丸』、昭和7/12 『ベルギーの少年』、昭和8/12 『熊の家』、昭和9/3 『ロバンソンの森』、昭和10/3 『デンマークの小学生』、昭和11/2 『王様の机1』、昭和12/4 『王様の机2』、/7 『最後の教訓』、/8 『馬にへこまされたオランダ人』、昭和13/7 『可愛い手の水』、/8 『霧』(再)
 「婦人子供報知」……昭和7/9・28 『親切なフランス少年』、/10・26 『学問の好きなドイツ少年』、昭和8/1・11 『イギリス少女の機知』、昭和9/9・23 『慈悲のバイオリン』、昭和10/4・28 『忠犬フィリップ』

「上毛新聞」……昭和3/2・14・17 『沈毅なホルマン』、/7・27・29 『偉くなった日の出松』

「国民新聞」……昭和10/5 『梅雨と子狸』

「女学文芸」……大正14/5 『子供舞踏会』

「婦人倶楽部」……来章15/7 『朝』

「新女苑」……昭和14/1 『章句・ジャンモレアスに』

おわりに

以上のように、同じ時期に生まれ育ち乍らも、全く他人のように通過して行った一人であったが、ここでみたように僅かな接点もみえていた。この接点を両者がそのままに永遠の別れとなったのだが、その運命とはまことに珍奇なものに見える。しかし二人のうちには互いを意識した点が必ず存在しそれぞれこそが二人の運命を決めた時間だったともいえはしまいか。

(06/9/7)